

『世説新語』

一 貴族の生き方を読む一

長谷川 滋 成

(広島大学教育学部教授)

畢^ハ帝^ハ余^ハ武^ハ
 便^チ怪^シ人^ハ帝^ハ嘗^テ
 去^ル而^レ皆^チ降^ル
 問^フ綾^ヲ王^ハ
 之^ヲ羅^ハ武^ハ
 答^ヘ袴^ヲ子^ノ
 曰^ク襪^ニ家^ニ
 一^ヲ以^テ子^ノ
 以^テ手^ヲ武^ハ
 人^ハ擊^グ子^ハ
 乳^ヲ飲^ル供^ス
 飲^レ食^ヲ饌^ヲ
 犬^ニ蒸^ハ並^チ
 一^ヲ犬^ハ用^フ
 帝^ハ肥^ニ瑠^ヲ
 甚^ク美^ニ器^ヲ
 不^レ異^ニ婢^ヲ
 平^ク於^テ常^ニ
 食^ヲ味^ニ
 未^ダ知^ラ名^ヲ

(伏修篇)

時^ニ重^シ牛^ノ
 心^ヲ灸^ヲ
 坐^ス客^ノ
 未^ダ噉^ラ
 頭^ハ先^ニ
 割^キ啗^シ
 義^ニ之^ニ
 於^テ是^ニ
 始^メ知^ラ名^ヲ

俗^ニ以^テ牛^ノ
 心^ヲ為^ス
 貴^ト故^ニ
 義^ニ之^ニ
 先^ニ食^ラ
 之^ヲ

〔晋書〕卷八〇王羲之伝

(伏修篇劉孝標注)

王^ハ右^ハ軍^ハ
 少^キ時^ハ
 在^リ周^ノ
 侯^ノ末^ニ
 坐^ス割^キ
 牛^ノ心^ヲ
 噉^ラ之^ヲ
 於^テ此^ニ
 改^メ觀^ル

(伏修篇)

牛^ハ子^ヲ既^ニ夫^ニ王^ハ
 心^ヲ先^ニ恃^ミ一^ヲ君^ハ
 来^レ射^セ手^ヲ我^ガ夫^ニ
 一^ヲ武^ハ快^ク射^ハ有^リ
 須^ル子^ノ且^ツ不^レ牛^ノ
 與^ニ一^ヲ謂^フ如^ク名^ニ
 灸^ヲ起^シ一^ヲ卿^ニ八^ノ
 至^リ便^チ駿^ノ今^ハ百^ノ
 一^ヲ破^ル物^ヲ指^シ里^ノ
 鬱^シ的^ヲ無^ク賭^ク常^ニ
 便^チ卻^キ有^ニ殺^ス牛^ノ瑩^ク
 去^ル胡^ノ理^ニ一^ヲ以^テ千^ノ
 牀^ニ叱^ス左^ノ右^ノ一^ヲ万^ノ
 一^ヲ右^ノ然^レ可^ク對^ヘ武^ハ
 一^ヲ速^ク探^ル令^ム君^ハ
 一^ヲ武^ハ君^ハ語^ル君^ハ

(伏修篇)

漢文の教科書を見ると、王者・諸侯・庶民・將軍・兵士・詩人・文人・学者・思想家、皇妃・宮女、農民・商人、食客・策士・暗殺者等々、さまざまな人間が登場するが、その人間たちの生き方は、おおむねある一面がクローズアップされ、他の面はカットされる。

人間十人いればその生き方は十とおりある。では一人の人間の生き方は一とおりかといえば、なかなかそうはいかない。「一以て之を貫く」人間は少ない。表の生き方があり、裏の生き方がある。極端な言い方をすれば、一刻一刻変わっているといつてもいい。

一人の人間の生き方、特に中国の過去の人間の、一刻一刻変わる生き方を知ることが不可能だが、せめて表の生き方と裏の生き方の二面は知りたく思う。

こういう思いから、中国の魏・晋のころの貴族たちの生き方をとりあげてみたい。この時代の貴族たちの生き方を伝える話は、『世説新語』に特に多く収録されており、その中から王濟（おうさい）の生き方をとりあげる。表の生き方は政治の面、裏の生き方は奢侈の面。裏の面としては、牛の心臓一切れに大金を賭ける、豚を飼育するのに女性の乳を飲ませる、の二つをとりあげる。

まず裏の生き方の一つ目。王濟は、形状も気力も優れた王愷（おうがい）の牛の心臓一切れに大金を賭け、それを食ったのである。

王君夫（わうくんふ）に牛有り。八百里駁（はつびやくりはく）と名づく。常に其の蹄角（ていかく）を瑩（みが）く。王武子（わうぶし）君夫に語る、「我が射は卿（きみ）に如（し）かざるも、今指（さ）して卿の牛を賭（か）すれば、千万を以て之に対（こた）へん」と。君夫既に手快（しゅかい）を恃（たの）み、且（か）つ謂（おも）へらく、「駿物（しゅんぶつ）をば殺す理有ること無けん」と。便（すなは）ち相ひ然可（ぜんか）す。武子をして先に射せしむれば、武子一起して便ち的（まと）を破る。卻（しりぞ）きて胡牀（こしょう）に拠（よ）りて、左右を叱す。「速やかに牛の心（しん）を探り来たれ」と。須臾（しゅゆ）にして炙（しゃ）至り、一鬩（いちれん）して便ち去る。
（伏修篇）

君夫は王愷、武子は王濟のこと。牛の名の八百里駁は、おそらく千里馬にちなんでの命名で、一日に八百里走る駁という意味であろう。駁は馬に似ていて、虎や豹を食う猛獸。それを牛の名にした。名は体を表すというが、駁には形状の凄さ、気力の凄さが窺える。凄さを増すために、王愷は普段から蹄（ひづめ）や角（つの）を瑩（みが）いていた。伝えられるところによると、王愷は牛にはうるさかつたようである。春秋時代の寧戚（ねいせき）の著書とされる「相牛經（そうぎゅうけい）」は代々引き継がれて、当時晋の武帝の祖父にあたる宣帝が持っていたが、王愷それを手に入れている。この書物は書名からして、牛相を説いた

ものであろう。王愷の牛には陰虹(いんこう)といわれる、尾から頭にかけて双筋があつたというが、『相牛經』には陰虹のある牛は千里走ると記されている。王愷はこの書物に記されているとおり、牛を飼育したと思われる。

王濟は、王愷が手塩にかけて育てた八百里駁を的にして、弓を射させて欲しい、と交渉した。外れたら一千万金払う、それが王濟の条件である。思案した王愷は二つの理由で交渉を承諾した。一つは自分の方が腕に自信があること。手快とは腕がいいこと。二つはこの優れた物を王濟は殺すはずがないこと。駿物は優れた物で、八百里駁を指す。承諾した王愷は、王濟に先に射させた。ところが、王愷の思惑は一瞬にして吹っ飛んだ。王濟は一発で、的を射止めてしまったのだ。

八百里駁を射殺した王濟は、殺すことが最終の目的だったのではない。その肉を食うことであつた。王濟は射殺すると、その場を離れて椅子に腰掛ける。胡牀は背もたれのある、折り畳み式腰掛け。それにやおら腰掛け、家来に命じた。牛の心臓を取り出せと。食うのは肉ではなく、心臓。心臓は珍味で、美味だったのである。

王濟のことではないが、書で名高いあの王羲之(おうぎし)に次のような話がある。

王右軍(わういうぐん)は少(わか)き時、周侯の末坐に在りて、牛の心を割きて之を噉(く)らふ。此に於いて改觀せらる。

(伏修篇)

俗に牛の心を以て貴しと為す。故に羲之(ぎし)先に之を食らふ。
(伏修篇劉孝標注)

時に牛の心の炙(しゃ)を重んず。坐客未だ噉らばざるに、顛(がい)は先に割きて羲之に啗(く)らはしむ。是に於いて始めて名を知る。〔晋書〕卷八〇王羲之伝)

王右軍は王羲之、周侯は周顛(しゅうがい)のこと。王羲之も牛の心臓を食しているが、それは牛の心臓の炙、焼き心臓である。貴重品だったに相違ない。誰もが食うことのできない貴重な焼き心臓を、王羲之は食わせてもらった。しかも末席にいて食わせてもらった。だから改めて見直され、名を知られることになつたのである。

王濟が食つたのも焼き心臓。命じられて牛の心臓を取り出した家来たちは、しばらく経って焼き心臓を持って来た。ご満悦な王濟。たつた一切れ食つて立ち去つた。多くは食わない。貴重な焼き心臓、しかもそれをたつた一切れ食つて立ち去る。千万金の値打ちがあると見て、大金を賭けた牛である。貴重な珍味・美味をちよつと食す——奢侈の極みなのだらう。

この話、王濟は初めから牛の心臓を食う魂胆であつた。

その心臓は田畑を耕したり、荷車を引いたりする牛のそれではなく、天下に名の知れた牛でなくてはならなかつた。

そこで王愷の八百里駁に白羽の矢が当たつた。心臓を食うということは、息を止めることであり、そこには八百里駁を飼育している王愷に対する、王濟の対抗心がある。俺の

弓は君には及ばない、と巧みに持ちかけ、宿願を果たしたのである。

次に裏の生き方の二つ目。王済は、豚に女性の乳を飲ませて豚を飼育し、それを天子の武帝に食べさせたのである。王済の奢侈はなかなかで、意表をつき奇抜さを狙い、それを実践する。

武帝嘗（かつ）て王武子の家に降（くだ）る。武子は饌（せん）を供するに、並（み）な瑠璃（るり）の器を用ふ。婢子（ひし）百余人は、皆な綾羅（りょうら）の袴褌（こら）にして、手を以て飲食を擎（ささ）ぐ。蒸豚（じょうとん）は肥美にして、常味に異なる。帝は怪しみて之を問ふ。答へて曰はく、「人の乳を以て猪に飲ましむ」と。帝は甚だ平らかならず。食未だ畢（お）はずして、便（すなは）ち去る。（伏修篇）

武帝は西晋の初代天子。王済邸に天子がお出ましになる。王済が名門であり、貴族である証である。その時、武帝をもてなす王済の様子がこの話。

食器はすべて瑠璃製。瑠璃は紺青色の玉。金・銀・珊瑚などと、七宝の一つ。給仕係の婢子つまり侍女は総勢百余人。彼女たちは皆な綾羅様の薄絹の衣服を着て、一人ひとり飲み物や食べ物のご馳走を持ち、手ずから武帝に捧げる。袴はももひき、褌はもすそで、いづれもスカートの種類。下衣を飾るのだから、上衣を飾ったのはいうまでもあるまい。

手を以て飲食を擎ぐとは、武帝の席までご馳走を両手で捧げ持ち、侍女手ずから手渡すことのようにある。敬と手の合字の擎の字には敬の意味があり、しかも手を以てとある。鄭重な作法である。これを百余人次々行うのだから、ご馳走は百余種を数え、加えて鄭重な作法、奢侈の極みという外ない。ご馳走の一つに蒸し豚がある。それは脂がのつて美味い。そこらにある味ではない。猪は豚の子。一般に親豚より子豚の方が美味いとされる。

奢侈という点でいえば、ここまでの話は普通のこと、そう怪しむことではあるまい。ところが蒸し豚を食した武帝は、その味を怪しんだ。帝は怪しみて之を問ふ、とある。日ごろ天下のあらゆる美味を食している武帝が怪しんだというのだから、かつて食したことのない味だったにちがいない。

人間の乳を飲ませて育てました。王済の答えである。人間は当然女性。王済は豚に乳を飲ませる女性を養っていたのだらうか。女性の乳を搾って豚に飲ませる。それも異様な光景だが、仮に女性の乳首を豚が吸っていたとすれば、もうこの世のことではない。

王済の答えを聞いた武帝の反応は敵しかった。心極めて穏やかならず、食事を中断し、即刻その場を去った。なぜ去ったのか。この世に起こってはならないことが、この世に起こったからである。蒸し豚の味は確かに脂がのつて美味だったが、武帝はそれを許すことができなかつた。「晋

書」卷三武帝紀の制に、「奢侈（しやそく）を制して以て儉約（けんやく）に変じ、澆風（ぎょうふう）を止（や）めて淳朴（じゅんぼく）に返る」とあるように、武帝は奢侈（贅沢）より儉約を、澆風（輕薄）より淳朴（質素）を重んじた天子であった。

王済の意表をついたこの奇抜さ——奢侈も度を越すと、気味悪く寒気がする。後世の人はこのことを不愉快に思ったのか、唐代に編纂された『晋書』卷四二王済伝は、人の乳を以て之を蒸す、と変えている。これだと女性の乳で豚を蒸したことになる。先の記録よりはみしたが、異様であることに変わりはない。

ところで王済は、祖父の王昶は魏の司空、父の王渾は司徒・侍中の高官に昇り、王済もまた二十歳で官位に就いて最後は太僕卿に至り、死後は驃騎將軍を追贈された。王氏は代々国家の中枢にいて政治を執り、内外の諸問題を処理しなくてはならぬ、責任の重い立場にあった。太僕卿は九卿の一つで、驃騎將軍は三公に次ぐ武官の重職。王済は峻厲な人で、法に従って悪事を正す政治を行った。

以上によると、王済の表の生き方は政治の面であり、二つの奢侈の話は裏の生き方の面である。王済は貴族だからこの程度の奢侈は表の生き方であって、裏の生き方ではないのかも知れないが、奢侈にうつつを抜かすこの生き方は

裏の面である。従って、王済の裏の生き方を伝える二つの話は、当時の貴族、及び貴族が支配する政治の腐敗を意味する。言い換えれば国民の不幸を意味する。貴族だけでも責められるが、貴族が政治家であるだけに、王済の奢侈はいっそう責められる。

政治家が裏で自分の欲望を満足させることで、国民が虐げられ泣かされる。この構造は中国の歴史には珍しくなく、どの時代にも多かれ少なかれあるが、戦争のための徴兵、土木工事のための労役、租賦のための納税等は、その構造は一目瞭然だが、貴族の奢侈となると、一目瞭然とはいかない。

王済の表と裏の二つの生き方を教材化することは、魏・晋のころの貴族の常識外れの奢侈を読み取るとともに、貴族⇨政治家という当時の公式から、国民への影響を考えるという課題が設定できよう。

王済の奢侈の話は興味本位に読まれることがあるかも知れないが、言葉の使い方、表現の方法、会話の運び方、句法の使い方等、学習することは少なくない。

（平成九年十二月二十日）

※なお、本「教材発掘」への投稿規定は編集後記をご覧ください。